

キャプナ★ニュースレター

寒風の中にも、どこか春の気配を感じるようになりました。

来月 25 日には、愛知万博の開幕。そして 5 月 1 日には、地球市民村に CAPNA のパビリオンが登場します。CAPNA 10 年目の春は、未曾有の忙しさの中で迎え、過ぎていくことになりそうです。スタッフ一同、無事に乗り越えられるように、チームワークを高めていきたいと思っております。会員の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

CAPNA 一同

Vol. 39

善意の重み、ずっしりと

“子どもを救おう！未来を守ろう！！”のキャッチフレーズで昨年実施された「CBC チャリティ募金」より、この度 CAPNA は 30 万円の配分金をいただきました。

募金活動はロータリークラブを初めとするたくさんの方々との協力でわれ、また、集められた募金は 12 月 17 日、中部日本放送株式会社（CBC）本社にて、保護を必要とする児童等が自立するために必要な援護を行っている東海 3 県下の児童養護施設など、15 団体に寄託されました。その中に CAPNA が選ばれた事を光栄に思うと同時に、これは CAPNA を支えてくださる会員の皆さん全員の名誉であると感じています。たくさんの方々の善意に感謝するとともに、今後の活動に生かさせていただきます。



Book 紹介

「ネグレクト」

杉山春著 小学館 本体価格 1300 円

2000 年 12 月、愛知県武豊町で起きた養育放棄による 3 歳女児の餓死事件。その年若い両親をマスコミはこぞって「鬼畜夫婦」と責め立てました。しかし、彼らはなぜ子どもが餓死するまで世話をしなかったのでしょうか？その育児能力の欠如、精神的幼さの背景にある厳しい生育歴や、愛情を強く求めていながらそれを感情として外に表すことが苦手、また、愛情を他者に適切に注ぐ事が

出来ないなどの、一般的に理解されにくい一面を、著者は、彼らとの手紙のやり取りや綿密な取材によって裏にわかりやすく私たちの目の前に引き出してくれます。まるで、真実は何か？と問い掛けて来るような本書は、事件を理解する上で最も適切な一冊と言えるでしょう。ぜひご一読を。（文中、公的立場にない人物は仮名になっています）

<お知らせ>

次回 CAPNA 市民講座は 2 月 24 日（木）講師は矢満田篤二さん（CAPNA 理事）です。

会場は、名古屋市女性会館視聴覚室。午後 6 時半から 8 時半まで。参加費は会員無料、一般 500 円です。皆さま、奮ってご参加ください。

ご寄付

次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

(12-1 月分、順不同、敬称略)

- 【団体】 聖心会修道院、PSJ(フィリピン ソサエティ イン ジャパン)、中部日本放送(株) 名古屋 II ソンタクラブ NPO 法人ボランティアネイバーズ
- 【個人】 大川能子、中川信治、牧野慎裕、曽根富美子、平岩みほ子、岩田みつ、棚橋てつ代 山田裕子、堀内久美子、後藤久雄、中島香代子、国枝京子

CAPNA ニュースレター 39 号 (隔月刊 22 号)

2005 年 2 月 10 日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA 事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内 1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

次の10年へ。新たな展開を！

JaSPCAN 福岡大会報告

JaSPCAN（日本子どもの虐待防止研究会）の第10回学術集会在昨年12月10、11日、福岡市で開催されました。今年もCAPNAから多数のメンバーが参加し、最新の動きを学ぶとともに、全国の仲間たちと交流を深めました。メンバーの報告を紹介します。（敬称略）

10回の節目を迎えて

理事長 岩城 正光

JaSPCANの10回目の学術集会でした。この10年間で子ども虐待への社会的な関心は高まり、国会でも児童虐待防止法の制定、児童福祉法の改正が行われてきました。全国でもCAPNAのような子ども虐待防止活動に取り組む市民団体が50以上も誕生しています。10年前の状況と比べると、本当に様変わりしました。

JaSPCANも、この福岡大会を機に「研究会」から「学会」になりました。理事・運営委員が改選されました。会長も小林登さん（神奈川・子どもの虹情報研修センター長）から小林美智子さん（大阪・大阪府立母子保健総合医療センター）に変わりました。

小林登さんは10年近く会長をされ子どもの虐待について研究者や行政、市民団体をまとめてこられました。その功績はもちろんのこと、その人柄には本当に尊敬に値します。CAPNAが2001年に朝日社会福祉賞を受賞したときにも、わざわざ授賞式にご出席されました。

小林美智子さんもCAPNAにとって大変恩義のある方です。CAPNAの最初のブックレット「子どもの虐待の実態と対応」（1998年）は小林さんの講演録でした。小林美智子さんは総会で「JaSPCANが今後学会となっても、それは従来の研究者中心の閉鎖的な学会ではなく、多くの市民ネットワーク活動をしている方も積極的に参加できる、開かれた学会を目指していきたい」と発言されました。

新会長のもと、副会長として斉藤学さん（東京・家族機能研究所）・椎名薫子さん（栃木・子どもの虐待防止活動を考えるネットワーク）・津崎哲郎さん（京都・花園大学社会福祉学部）が選任されました。

CAPNAとしては、私が理事に、白石淑江さん、菱田理さん、矢満田篤二さんが運営委員にそれぞれ選任されました。これからもJaSPCANの活動に積極的にかかわっていきます。

昨年は、児童虐待防止法及び児童福祉法の改正がなされた重要な年でした。従って福岡大会の中心テーマは「虐待防止の法制度改革」でした。法制度改革は、大変に手間のかかるものです。厚生労働省、文部科学省、最高裁判所の関係者も指定講演され、まだまだ検討すべき課題は山積していることを実感しました。私は、虐待防止に司法の関与が大きく立ち遅れていることを痛感し、今後のさらなる改正に努力したいと思いました。

私は、分科会「虐待死亡事例から学ぶ」を企画し、司会を務めました。キャプナ弁護団の山田麻登弁護士とCAPNAの加藤悦子さん、前大阪中央児童相談所長であった津崎哲郎さんに報告・討論をお願いしました。虐待で亡くなった子どもの生命を無駄にしてはなりません。なぜ大切な生命を救えなかったのか事例検証して、今後の改善策に生かしていかなくてはなりません。

キャプナ弁護団の協力を得てはじめて実現できた分科会であったと思います。親との対立構図で、支援が中断・静止しないように、迅速な積極的介入を心がけることが大切であることを痛感しました。

文部科学省への提案

専務理事 兼田 智彦

毎年、JaSPCANの大会では学校教育の分科会に参加しています。しかし、学校の教師は数が多いので、虐待への対応などの情報が教師全体へ浸透するのにはかなりの時間がかかります。その間に多くの子どもたちが泣き寝入りをしていると思うと、申し訳ない気持ちになります。

どのようにしたら、多くの教師に虐待の発見と対応のノウハウを身につけてもらえるのか？なかなか難しい問題です。

そこで、昨年の大会でも提案しましたが、文部科学省が毎年5月に行う学校基本調査に、ぜひ虐待の認知件数、対応方法などを調査する項目を入れてほしいと思います。そうすれば、学校現場でもどこに虐待が潜んでいるのが浮かび上がってくると思うのです。

暁学園の実践に感動

常務理事 加藤 悦子

JaSPCAN福岡大会。今回、最も印象に残っているのは2日目午前の分科会での暁学園の実践発表である。

...驚いた。そんなすばらしい取り組みをしていたのか！まさに「灯台もと暗し」。

子どもの状態を、一人ひとりきっちりとアセスメントする。日常生活、入所以前の生活、心理アセスメント...。様々な職種が関わる。そこからアプローチを考え、その効果を科学的に検証する。発表者である暁学園の臨床心理士、藤澤さんは、淡々と報告していた。言葉で書くと簡単だ。でも、それらを実際にやり、継続していくことは想像以上に大変なはずだ。

暁学園の菱田園長は、大学生にはかなり厳しい。ハンパに勉強してヒアリングしにいった学生はみな、泣きそうな顔をして帰ってくる。教員の私としては、ひそかに「学生なんだからサ、少し大目に見てあげてよ」と思ったりしたのだが...

反省した。これは、ハンパな気持ちで聴くべき事柄ではない。身近にあった宝物に気付いた。それが今回の大きな収穫だった。

記録制約のあり方を考えて

理事 矢満田 篤二

この数年の大会で感じ続けている疑問点は、大会全期間中、全面的にすべて写真撮影や録音を禁止していることである。発表者の中には、自分が報告した画期的な改善策や実践活動の記録を参加者が持ち帰り、地域の虐待防止に役立ててほしいと願っている人もいるはずだ。今後の大会主催者に対して、

そうした意向を把握して、部分的な制約の解除を図ることを求めたい。進行中のひんぱんなフラッシュ撮影は自制されるべきだが、大会全景などは、開始直前に、1～2分間の撮影を認めても支障はないと考える。撮影理由は、職場で留守を守ってくれた同僚たちへの伝達講習で効果的だからだ。なお、ケース報告と守秘義務に関しては、神谷信行弁護士がmindixぶらざの2005年冬号(明治安田こころの健康財団・1月25日発行)に寄稿している「守秘義務と倫理」を読んで襟を正す思いがしたことを申し添えたい。

一步前進！

電話スタッフ 堀内 久美子

昨年に続いて総会に出席しました（遅刻でしたが）。大会アンケートの「回答者の専門分野」に「市民団体」という項目も設けられて、一步前進だと思いました。昨年の総会では「学会になっても市民団体の位置付けを軽んじないでほしい。」と発言しました（事前に岩城さんに約束したので）。その時、大会アンケートの「回答者の専門分野」の選択肢で市民団体の該当するものは「その他」しかないという不備を指摘したのです。

役員改選で岩城さんが理事に、運営委員にCAPNAから白石さんはじめ4名がなられたのでよかったです。選挙で自分達の代表を送り出すことは大切だと改めて思いました。

2日目の分科会A-2「特別なニーズ（児童虐待・軽度発達障害）を持つ子どもと家族を支える学校システムづくり」は大変充実していて勉強になりました。

「ホールディング」という関わり

会員 柳川 佳延

福岡大会では、「集団内での子どものケア」分科会と、「発達障害と児童虐待」の分科会に出席しました。

・は参加型のワークショップという建前でしたのでロールプレイも取り入れてとても実践的かつ論理的でした。私の勤務校は学区に児童養護施設がありますので子どもたちとの毎日の関わり方に活かしています。また、CAPNAの学校関係者のスタッフの一人として、ここでの成果を「学校関係者虐待防止講座」に取り入れたいと思います。具体的には学校や施設のような現場で子どもたちと接する場合に、指導でも治療でもない「ホールディング」という関わり方が有効であるとのことでした。

生活の場面や空間がそのまま虐待を受けた子どもたちの自立につながる取り組みであるという考え方で「環境によるホールディング・対人関係によるホールディング（代理自我）・子ども自身によるホールディング」というステップを踏んでいくものです。環境によるホールディングは子どもに関わる人の態度やその人が醸し出す雰囲気のようなもので子どもに対してこの人は自分の気持ちを理解しようとしてくれているというメッセージが伝わるのが大切であるとのことでした。ロールプレイではパニックになった子どもに対処する方法を体験しました。どうしていいかわからないことが多い中で、この方法を知っているのはひとつの支えになると思っています。

・分科会は軽度発達障害と虐待との関係を考える機会になりました。軽度発達障害をもっている子どもは親にとって「育てにくい子ども」です。とくに今回は親子共に同一の発達障害の基盤を持ち、そこで生じた子どもの虐待の問題が取り上げられました。アスペルガー症候群のお父さん、お母さんは子どもの気持ちや分が分からなくて一方的な子育てになり、虐待につながるというものです。この問題については文部科学省が進めている特別支援教育が成果を上げることが必要です。親の会の差し追った気持ちと現場の教師の実感のなさとのギャップは大きなものがあります。改めてCAPNAの人たちの行動力はすごいなあと思った次第です。